

# インクルーシブな社会をめざす実践

～都市型中間施設(居場所・たまり場)づくりとその困難に焦点を当てて～

**日時** 2009年2月14日(土) 10:00-16:00

**場所** 神戸大学発達科学部大会議室等

**参加費** 無料

**申込** お名前、ご連絡先の他、どのような方が分かるような情報を一筆いただき、郵送、ファックス、メールでお申し込み下さい。その際、必要な方はお弁当をお申し込みいただけます(飲み物込みで600円)。

## スケジュール

10:00-12:00 全体会

発題者

- ・山元美和(浜松・いっぽ)「知的障害のある人の自立生活を支える地域の開発とその困難」
- ・川上慶子(神戸・つむぎ)「学童保育における障害のある子どもの参加とその困難」
- ・大森八重子(みなと障がい者福祉事業団)「知的障害のある人の関わる喫茶での経験」
- ・小武内行雄(神戸大学・みのり)「大学における知的障害のある人の就労支援の意義と困難」

13:00-15:20

分科会1(鼎談と自由討議)

倉本智明(東京大学)

三井さよ(法政大学)

津田英二(神戸大学)

分科会2(本人たちの集い)

報告者

竹内妙(浜松・いっぽ)

15:30-16:00 全体会

## 問い合わせ・申し込み

郵送 〒657-8501 神戸市灘区鶴甲3-1-1 神戸大学発達科学部 津田英二宛

ファックス 078-803-7971

E-mail zda@kobe-u.ac.jp

主催 神戸大学大学院人間発達環境学研究科 ヒューマン・コミュニティ創成研究センター

後援 大学院GPプロジェクト「正課外活動の充実による大学院教育の実質化」事務局



## 都市型中間施設

中間施設というのは、近代社会でさまざまに分化した機能を再統合した施設である。障害のある人やその家族、高齢者、幼児や児童、勤労者、主婦、青年層、外国人など、多様な人々と等距離にあるという意味、すなわち誰かが独占したり排除されたりしないという意味での中間施設でもあるし、親密圏と厳しい競争社会との橋渡しをするという意味での中間施設、ボランティア精神に特徴づけられた市民社会の連帯を重視しつつ専門的知識や技術も使用可能であるという意味での中間施設、公共的でもあるし私事も排除されないという意味での中間施設、多様な課題を視野に収めつつ特化した課題解決にも対応できるという意味での中間施設でもある。

このような概念を提示するのは、国家が国民の中に問題を発見し対応することで社会の均衡を保とうとしてきた近代社会が、人と人とを分断し、社会の問題発見・解決能力を低め、社会的排除の問題を顕在化させたという認識があるからである。障害を個人的な問題として捉える近代社会においては、障害のある人たちの支援は、私的空間である家族で行われることを基本とし、私事である家族による支援を国家による支援が補足するという形態へと発展してきた。障害のある構成員がいる家族の中にいまだに根強い入所施設建設の要望、それに専門家への容易い依存傾向は、このようにして育まれてきた。その分、社会の問題解決能力は低下する。実際に社会は、自らの抱える問題の解決を国家に委ね、社会に備わっていたはずの公共性を自ら薄めていった。少なくとも日本社会はそのような方向に進んできてしまったように思う。

障害のある人たちの地域生活支援は、障害のある人たちだけの問題として扱うのではなく、社会の中にある多様な問題の一部として把握するべきである。そのように捉えることによって、多様な問題を抱えた人たちどうしが出会い、連帯し、協働して解決する素地ができる。特に地域という限定された空間に多様な人間が混在する状況を前提にすると、多様な問題を視野に入れることは現実的な課題でもある。

実際に、障害のある人たちの地域生活支援において、障害の問題だけを扱うことなどできない。必ずといってよいほどジェンダー問題が大きな影を落とし、少なからぬ「困難事例」の背景にDVや虐待が見え隠れする。老いた両親と障害のある子どもの両方のケアに明け暮れる女性は一般的に見られるし、障害の有無とは関わりなく多くの青年が対人関係の形成に多くの課題を抱えている。そもそも障害のある人たちは、障害者である以前に子どもであり青年であり老人であり主婦であり勤労者である。多様な人たちが集まり、その中で多様な社会的な問題が顕在化することによって、社会の課題発見・解決能力が鍛えられる。障害の問題はそのような環境のもとに置かれることによって、個人的な問題ではなく社会的に取り組まなければならない課題となるのである。



### • *Guest Speakers*

#### 三井 さよ

それぞれに固有の「生」を生きる患者にどう対するかといった問題意識から、看護をめぐるさまざまな問題を追究してきました。法政大学准教授。主著に『ケアの社会学』（勁草書房）などがある。

#### 倉本 智明

日本に障害学を根づかせるべく、自らの経験と明晰な頭脳を武器に奮闘してきました。東京大学特認講師。主著に『障害学を語る』『障害学の主張』『セクシュアリティの障害学』（いずれも明石書店）などがある。

#### 竹内 妙

地域生活支援を受けながら自立生活をする知的障害者です。生涯を地域で生きるという当たり前の願いさえ叶えられない現実に抵抗しながら、浜松の「いっぽ」で支えあいのコミュニティをつくっています。